

アイデンティティ確認の場としての Ijahis Idja ——フィンランドにおけるサーミのフェスティバルを例に——

Ijahis Idja As a Site of Identity Confirmation:
The Example of the Sámi Festival in Finland

松村麻由
MATSUMURA Mayu

キーワード：サーミ、Ijahis Idja、音楽祭、フィンランド

1. はじめに

北欧のマイノリティの立場に置かれているサーミ Sámi には、伝統歌唱としてヨイク joik があるが、それは今日、サーミ文化を象徴するものになっている¹。そのヨイクは、北欧へのキリスト教布教以前、シャーマンの儀礼で用いられていたが、17世紀以降のキリスト教優位の施策による圧迫を受けて、プライベートな文化としてかろうじて伝承されてきた。キリスト教布教以降のヨイクの歌唱の場について、民族音楽学学者である Richard Jones-Bamman は、「家畜業を生業とした多くのサーミは、孤独を紛らわすため、あるいは家畜（動物）をなだめるという目的にのみ、ヨイクを頼りにした」と述べている（Jones-Bamman 2000, 306）。つまり、ヨイクはキリスト教布教を契機として、個人的な習慣として伝承されるようになってきたのである。しかし、1970年代になると、アルタダムの建設反対運動 Alta Conflict² をきっかけに、先住民としての権利を主張する運動、そして、自文化を見直す動きも同時期に展開され、こうした民族的紐帯を築いていく中で、ヨイクは自らのアイデンティティ表出の手段として位置づけられ、様々な音楽形態と結びつくようになった。こうした音楽は録音され、さらにはステージでパフォーマンスされるようになったが、現在、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドのサーミ地域 Sápmi では、様々なフェスティバルが開催され、サーミの文化を保存・継承するような機会が設けられており、このような場でもヨイクが聴かれる機会が増えている。本論文は、フィンランドで毎年8月に開催されるサーミの音楽祭 Ijahis Idja を取り上げ、この音楽祭がヨイクなどの固有の音楽を用いてアイデンティティ確認の場として機能している様子を考察する。本稿は、情報収集に限りがあったが、日本語による先行研究が存在しない研究テーマのため研究ノートとして発表する。

2. 先行研究

サーミと関連するフェスティバルは、フィンランドのみならず、ノルウェー、スウェーデンでも開催されている。サーミのフェスティバルに関する研究は複数あるものの、音楽学的研究は極めて限定されている。Thomas R. Hilder (2017) はノルウェーで開催される複数のサーミのフェスティバル

アルを取り上げている。その中で、Hilder は文化人類学者である Peter Phipps がハワイとアボリジニのフェスティバルについて取りあげた論文（2009）から先住民族のフェスティバルについて以下の部分を取り上げている。

文化的フェスティバルは、先住民族のコミュニティが、世代を超えて、また地域や国、国際的な文脈の中で異なる文化として認められ尊重されるための推進力の一部として、自分たちをより建設的に捉え、主張するための数少ない一貫した前向きな場になっている（Hilder 2017, 365）。

Hilderは、Phipps のこのような観点からサーミの音楽祭について考察し、サーミのフェスティバルが国家を超えた自決に向けて活動するなかで、北欧の文化や社会、そして政治をどのように広く作ってきたかを探求している。この論文の中で、Hilder はサーミのフェスティバルの特徴について、以下のように述べている。

サーミの音楽祭は、地元の音楽伝統を復興させる場を作り、国境を越えた音楽シーンを育成し、国際的な音楽的出会いと変化を促進することで、多様な美学と政治的關係に基づくアーティスト、機関、公の世界的ネットワークの規範となっている。さらに、サーミのフェスティバルは、北欧の主流文化に抵抗し、北欧諸国での自決を目指し、グローバルなネットワークで動員するための肥沃な空間を提供する（Hilder 2017, 375）。

Hilder が指摘するように、ノルウェーで開催される複数のサーミのフェスティバルでは、単にローカル性を重要視するだけではなく、民族自決を目指しており、北欧の主流文化に抵抗するような政治的意味合いを含んだフェスティバルとなっていることがわかる。

次に、Kari Jaeger と Reidar Mykletun（2013）は、ノルウェーのフィンマルク県で開催される3つのフェスティバルを例に、アイデンティティと帰属意識が人々や社会にどのような影響を与えているのか、そして場所への帰属意識がどのような意味を持つのかを検討している。彼らは3つのフェスティバルのひとつとしてノルウェーのカウトケイノで開催されるサーミのフェスティバルであるサーミ・イースター・フェスティバル Sámi Easter Festival を取り上げ、アイデンティティと帰属意識について以下のように述べている。

特に、カウトケイノは、来訪者の多くが居住者の親戚や友人であり、伝統や歴史が個人やグループを結束させるうえで重要な役割を果たしている。フェスティバルの慌ただしい日々の中で、過去と未来がひとつになっている。アイデンティティの意識は、若者にはポジティブなイメージを与え、年配のサーミの人々にはサーミ文化への敬意と受容を示しているのである。古い文化と新しい文化が溶け合い、「新しい」サーミのアイデンティティが形成され、今日何をもってサーミであるか、という意識が生まれる（Kari Jaeger, Reidar Mykletun, 2013, 223）。

この見解は、他のサーミのフェスティバルにも当てはまる可能性があるため、本稿の論考において参考にするべき点が大いにある。

また、Dieter K. Müller, Robert Pettersson (2006) は、スウェーデンの Jokkmokk Winter Market について取り上げている。彼らは先住民族とツーリズムの観点からサーミの遺産がどのように展示されているのか考察しており、さらに、サーミ以外の観光客にもフェスティバルが向けられている様子も検討している。

このように、ノルウェーで開催されているサーミの音楽祭や、サーミに関連するフェスティバルについては複数の文献がある一方、フィンランドで開催される Ijahis Idja を取り上げた論文は管見の限り見当たらない。

3. サーミに関する基本情報

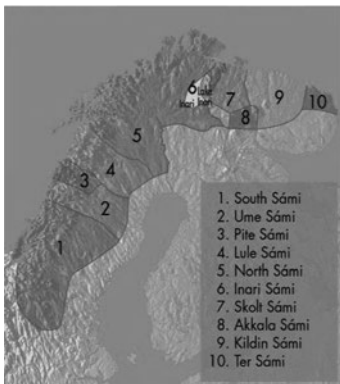


図1 サーミ諸語分布図

サーミは、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、ロシアのコラ半島に居住する北欧のマイノリティの立場に置かれた人々のことを指し、言語学的にはフィン・ウゴル語派のサーミ諸語を話す人々に分類される。人口は4か国合わせておよそ80,000人とされ、そのうちの半数以上がノルウェーに住んでいるとされているが、同化政策による混血化などの歴史的背景を理由に、正確な人口は不明である。彼らはサーミ諸語という独自の言語を持っている(図1)³。サーミ諸語は現在10の言語に区分されており、これらは消滅の危機に瀕する言語としてユネスコに登録されている⁴。現在、北欧においては、サーミが先住民族であることが認められているが、言語グループが同じであっても、居住している国や地域

により先住民族としての扱いや歴史的背景には相違がある。例えば、ノルウェーに居住するサーミは、強い同化政策の対象となっていたが、アルタダムの建設反対運動を始め、近代以降大きく進んだ先住民族の権利を主張する運動が展開されたことで、北欧の中で唯一 ILO 第169号条約を批准している⁵。他方、フィンランドにおいては、国家はサーミを積極的に同化しようとはせず、むしろ無視したとされているという説もある(小内 2018, 29)。

3-1. フィンランドのサーミ

2019年のデータによると、フィンランドには10,759人のサーミが居住しており、そのうち3,406人がサーミの地域に住んでいるという⁶。フィンランドには、北サーミ North Sámi、イナリ・サーミ Inari Sámi、スコルト・サーミ Skolt Sámi の3つのサーミのグループが居住している。この3つのグループのサーミ諸語は、イナリ Inari、ウツヨキ Utsjoki、エノンテキオ Enontekiö、そしてソダンキュラ Sodankylä の一部の地域に限定された形で公用語として認められている。北サーミは、サーミ諸語の中で最も話者数が多く、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドにまたがって居住している。イナリ・サーミは、伝統的にフィンランドのイナリ湖周辺に居住してきた。Lehtola によると、イナリ・

サーミの人口は約900人であり、イナリ・サーミ語を第一言語とする人は約350人と考えられている (Lehtola 2005, 64)。スコルト・サーミは、もともと現在のロシア、フィンランドに居住しており、人口は推定500人とさる (Lehtola 2005, 66)。彼らはフィンランド、ロシア間での国境線の変更や後述する複数の戦争の影響により、故郷を追われることになった。まず、フィンランドがロシアから独立した際に、それまでロシア領だったスコルト・サーミの居住地ペツァモ Petsamo がフィンランド領とされ、それまでソヴィエト・ロシア国民として居住していたスコルト・サーミは、フィンランド国民として組み込まれることになった (小内 2018, 38)。さらに、1939年から1944年にかけて勃発したフィンランドとソヴィエト連邦との対戦である「冬戦争」や「継続戦争」では⁷、ペツァモが戦場となり、スコルト・サーミはフィンランド国内に避難を強いられた。結果的に、フィンランドはペツァモをソヴィエト連邦に割譲することとなり、多くのスコルト・サーミ人はフィンランド国内にとどまることとなった。このような歴史的背景から、スコルト・サーミの中にはロシア正教を信仰しているケースもある。

3-2. フィンランドのサーミの伝統歌唱

フィンランドに居住するサーミの伝統的な歌のジャンルとして、北サーミのヨイク (あるいは luohiti⁸)、イナリ・サーミの livde、スコルト・サーミの leu'dd が挙げられる。Richard Jones-Bamman は、ヨイクについて、サーミ人の生活をサーミ人としてサーミ語で最初に書いた作家であるヨハン・トゥリ Johan Turi (1854-1936) の言葉を用い、以下のように説明している。

サーミ人作家ヨハン・トゥリ (1931) によると、ヨイクすることは人、動物、土地、出来事について思い出すための方法である。[……]全てのパフォーマンスは対一の関係であると考えられており、ヨイクは描写しているものを直接的に再構築する。このことは、記憶を可聴的なものにすることで、少なくともヨイクを続ける間、ヨイクをする人は概念的にその主題と結びつく。このように、家族や友人 (動物や場所は言うに及ばず) は、インスピレーションを感じたときにヨイクをする限り、その存在を維持できると認識される (Jones-Bamman 2000, 302)。

このように、ヨイクは、人、動物、土地、出来事を思い浮かべながら行うものである。意味をもつ単語を用いることもあるが、ヨイクは具体的な歌詞を持たない。歌詞のないこのヨイクに欠かすことができない重要な要素として音語 (Vocables) が挙げられるが、これは、no、na、lo、la、lai、vo、yo などのナンセンスシラブルを用い、この音語はヨイクの構造における本質的な要素であると見なされており、この音語の存在がサーミの表現としてパフォーマンスを形作っているのである。発声には鼻咽頭や喉を多用し、大きな声でヨイクをするほどハリのあるよく通る声になる⁹。

イナリ・サーミの音楽 livde はヨイクと同様に、人物、その土地の人々の記憶、動物を主題としている。1946年に Anna Briitta Mattus によって100曲近くの livde が録音されるなど、複数の録音資料が残っているが、livde は近年まで、忘れ去られた伝統となっていた。その要因として、まず、1900年代にイナリでスペイン風邪が流行し、多くのイナリ・サーミが亡くなったことで、livde の伝承が弱体化

してしまったことが挙げられる。また、前述した「冬戦争」と「継続戦争」も、livde の伝承者が減少してしまった要因となった。こうした伝承者数の減少以外に、livde の伝承が弱体化した要因として、北サーミのヨイクと非常によく似ているため、ヨイクと区別することができなかったことが挙げられる。実際に、フィンランド出身の作曲家でサーミの伝統音楽の旋律を採集した Armas Launis (1884-1959) は、イナリ・サーミ地域の約200のメロディを採譜したが、北サーミの音楽と区別することができなかったため、全てのメロディが北サーミの伝統に属すると定義した (Jouste 2011, English Abstract)¹⁰。

近年の研究では、フィンランドの音楽学者の Marko Jouste がヨイクの録音資料を研究した際に北サーミ語ではない音源を発見したことで livde の存在が浮き彫りになった。イナリ・サーミの音楽家 Anna Morottaja は、Jouste が発見したlivdeの録音資料を聴き、その中に親戚が livde をする音源があったと証言している¹¹。このような取り組みが行われたことで、livde の存在が再び知られるようになり、これがきっかけで、Morottaja が世界で初めて livde の CD をリリースするなどの動きにつながった¹²。

スコルト・サーミの音楽 leu'dd の主題は、主に動物に関する格言的なもの、地名の由来や歴史を扱った神話的なもの、人物に関するものに分類される。北サーミのヨイクと比較すると、より旋律的で叙事的な音楽である。また、スコルト・サーミは哀歌や子守唄を歌うことも特徴として挙げられるが、このような伝統は他のサーミにはあまり見られない。前述した通り、スコルト・サーミは歴史的にロシアとフィンランドの周辺に居住していたため、スカンジナビアとロシア北東部の両方の文化的交流があったとされる。そのため、leu'dd はフィンランドの叙事詩、カレリアのラメント、ロシアのラメント、バラードなどのフレーズを取り入れるなど、他の地域や他の音楽ジャンルと関連し、ユニークで多様、かつ重層的な要素を内包するにいたった (Jouste 2017, 81)。

このように、フィンランドには3つのサーミのグループが居住しており、それぞれのサーミのグループが独自の伝統的な音楽を持っていることが確認できる。北サーミのヨイクが広まった一方、イナリ・サーミやスコルト・サーミは人口や話者数が少ないため、結果的に伝統音楽の担い手も不足している。なお、livde や leu'dd の具体的な歌唱方法については、担い手の少なさから分析に必要なデータが充分ではなく、筆者自身がまだ把握しきれていないため、今後の課題とする。「5-2」では、これらの3つの音楽が音楽祭でどのように演奏されているのか、検討する。

4. Ijahis Idja について

4-1. Ijahis Idjaの概要及び開催地について

今回の検討対象である音楽祭 Ijahis Idja は、「先住民族の人々の音楽を称えるフェスティバル」¹³であり、毎年8月にフィンランドのイナリで2日にわたって開催されている (図2)¹⁴。なお、Ijahis Idja とは、「夜のない夜」を意味する。イナリは、フィンランドのサーミの行政を担う場所、そして文化施設でもあるSajosや、サーミの博物館



図2 フィンランド全体地図
イナリ村は★のあたり

SIIDA Museum、フィンランド国営放送の一部門で、フィンランドのサーミの主要なメディアでもある Yle Sápmi があるなど、フィンランドのサーミの文化的中心地として機能している。イナリ村は、ラップ県北ラップ群イナリ地方に属し、現在783人の住民の登録があるが¹⁵、この住民登録数はイヴァロ Ivalo に続き、イナリ地方で2番目に多い村であるという。なお、イナリ地方は豊かな自然を利用し、観光やサービス業が主な産業となっている。

4-2. Ijahis Idjaの歴史とその実践

Ijahis Idja は2004年から開催されている。立ち上げの経緯について、Ijahis Idja による公式資料は存在していないが¹⁶、Yle Sápmi やサーミ語版の Wikipedia、そして音楽祭のアーティストック・リーダーである Anna Näkkäljärvi-Länsman¹⁷によると、音楽祭の開催はサーミ教育センター長 Lassi Valkeapää とサーミ議会の責任者 Juha Guttorm によって発案されたそうである。この発案があった当時、文化センター Sajos の建設計画がされており、音楽祭が将来文化センターのコンテンツとして最適であると考えたようだ。Sajosは、フィンランドのサーミ人にとってより良い条件を作り出し、彼らが言語、文化、ビジネス活動、そして文化的自治を維持および発展できるようにすることを目的としている。なお、Sajos とは、イナリ・サーミ語で「人々が少しの間滞在する場所」を意味しており、建物はサーミの伝統工芸品からインスピレーションを受けている。開催当初から現在に至るまで、Ijahis Idja は、サーミ議会、イナリ・サーミ協会、サーミ教育研究所、SIIDA Museum（サーミの博物館）、そして Yle Sápmi など、イナリにあるさまざまな性格の組織が協賛することで実現した¹⁸。

Näkkäljärvi へのインタビューやサーミ語版の Wikipedia によると、2004年の第1回 Ijahis Idja は5月に開催され、お昼に開催される小さなイベントだったことが確認できた。第1回 Ijahis Idja では、伝統的なサーミの声の音楽、現代化されたサーミ音楽、サーミのポピュラー音楽のパフォーマンスや、子どもたちのための音楽ワークショップ、そして子どもたちがフェスティバルのステージで演奏する機会が設けられ、現在のプログラムと同じような内容で構成されていた。2005年にはイナリ湖の漁港で開催されたが、5月は気候が安定せず屋外での開催が難しいため、翌年から2011年にかけてサーミ教育センター内で開催された¹⁹。Ijahis Idja の公式 Facebook の写真からは、パフォーマンスは室内で行われ、屋外では、開催期間中にサーミの伝統工芸品を販売するマーケットが開かれていた様子を見ることができる。2012年には、文化センター Sajos が開館したため、Sajos の中庭に開催場所が移された。それ以降、Ijahis Idja は Sajos で開催されている。来場者数に関しては、Sajos が開館した2012年のフェスティバルでは2200人を記録しているが²⁰、音楽祭の規模は年々拡大し、2023年においては二日間の合計で3300人の来場者及び、公式ホームページなどから視聴できるライブ配信では、3500人の視聴者がいた²¹。つまり、イナリ村の住民の実に8倍を上回る人数が音楽祭を訪れているのである。

2023年にマーケットで伝統工芸品を売っていた A さんは、「1回目からこの音楽祭で Duodji（サーミの伝統工芸品）を売っているけれど、ずいぶん大きな音楽祭になったと思う。最初はとても小規模だった」と証言してくれた²²。A さんは毎年音楽祭からマーケットでの販売の依頼が来ているそうだが、自分で応募する販売者もいるようだ。

これらの事例から、音楽祭は開催当初は非常にローカルで小さな音楽祭だったものの、現在は来場者数も増え、開催当初よりも規模の大きな音楽祭に変化し続けてきたことが理解できる。このような変化について Näkkäljärvi は「場所、環境、来場者のバランスが取れてきたのだと思う」と証言している²³。

また、この音楽祭では、「風が吹いている (2012)」²⁴、「サーミの言語 (2019)」など、毎年何かしらのテーマ設定がされていた。しかし、Näkkäljärvi によると現在はその必要はないという。その理由について彼女は、「私たちのテーマは常にサーミ音楽のスタイルと、サーミの人々のためのフェスティバルを作り上げることだから」と説明している。つまり、この音楽祭はサーミの人々、すなわちサーミ内部に向けて開催されており、また、サーミ音楽の流行を発信する場としてもこの音楽祭が機能していることが読み取れる。なお、この音楽祭ではロシアの北方少数民族であるハンティ族やエヴェンキ族のアーティストなど、サーミ以外の先住民族がゲストとして招待されることがあり、国境を越えて他のマイノリティとも結束する様子も見受けられる。

4-3. Ijahis Idjaの位置づけ

フィンランド国営放送 Yle のホームページ上でリリースされている記事では、Ijahis Idja が重要と見なされる理由を五つ挙げている。(1)サーミ人が主催する音楽祭であること、(2)ヨイクを聴くことができること、(3)サーミのローカルな著名人が出演すること、(4)子どもや若者にとっての特別な機会であること、(5)小規模であることである²⁵。以下、これらについて具体的にその内容を確認しておこう。

(1)サーミの民族自決権についてはフィンランドとサーミの間で長年軋轢があるが、この音楽祭に関してはサーミ自身によって組織され、最初から最後までサーミによる自己決定がなされることで、自分たちの理想と考える形が実現していることが窺える。

(2)従来ヨイクは個人的な習慣として、そしてプライベートな文化として伝承されてきた。そのため、公の場でヨイクを聴けることにより、ヨイクをする習慣がないサーミの人々にとっては貴重な機会が提供されている。かつて閉ざされた空間で伝承されてきたヨイクは、昨今、CD 化やステージ化が進んだことで歌唱の場が変化した。ヨイクは、単に音語だけを用いるのではなく、歌詞を組み合わせることで人々に感情を吐露する存在になっている。そのため、オープンな場で「共有されるヨイク」に歌唱の場が変化してきていることが確認できる。さらに、livde や leu'dd を聴ける場が提供されることで、各サーミがそれぞれのルーツとする音楽に触れるきっかけにもなっている。

(3)音楽祭は、著名なサーミのアーティストが出演していることで、アマチュアで活動しているサーミの人々や、サーミの新人アーティストもインスピレーションを受ける場となっている様子が確認できる。公的な場でサーミに関する問題を外部に訴えながら活動するアーティストは、言わばサーミの人々にとっての代弁者でもある。また、いつかステージに立つことに憧れをもつ子どもたちもいるかもしれない。

(4)この音楽祭では、子どもや若者のために様々なワークショップが設けられている。実際に、2023年8月18日の午前中には Sajos や SIIDA で子どもと青少年のためのプログラムが開催されていた²⁶。例えばトナカイの皮を鞣す、編み物をするなど、現代においてもサーミの伝統を追体験できるような

機会が提供されていた。筆者は子どもと青少年のためのプログラムには参加していないが、音楽に合わせて子どもたちが踊っている姿が Ijahis Idja の公式 Facebook で確認できる。また、音楽祭は深夜まで開催されているが、深夜になっても子どもたちがアーティストのパフォーマンスを聴いたり、会場の敷地内で友達と遊んだりする姿が見られた。この地域に住む子どもたちにとっても、非日常的で特別なフェスティバルとなっていることがわかる。また、音楽祭では子どもたちがスクールイベントとしてステージでパフォーマンスする様子も見られた。詳しくは「5-1」で説明する。

(5)音楽祭そのものは小規模ではあるが、筆者が観察した範囲では、観客は小規模ゆえに顔見知り同士が非常に多い印象だった。アーティストと観客が顔見知りのケースもあり、現地の人々の再会の場であると同時にコミュニケーションの場にもなっていることがわかる。ステージでパフォーマンスしていないアーティストも音楽祭に観客として訪れており、アーティストと観客の距離が近いことも小規模であることが重要である理由の一つだと考えられる。今回筆者が観察した中では、子どもがアーティストに話しかけ一緒に写真を撮る姿や、音楽祭会場に併設されているバーでも、アーティストと観客が交流する様子が確認できた。サーミ人として成功したアーティストを身近に感じる機会をもつことによって、マイノリティであることがネガティブに捉えられがちな印象を逆転させる効果があるように感じた。なお、上記(1)から(5)の特徴は、他のサーミのフェスティバルにも共通することが考えられるため、今後も調査予定である。

次に、この音楽祭の助成金について見ておきたい。この音楽祭の全体的な予算についてプロデューサーに問い合わせたが、2024年1月9日現在では回答が得られていない。しかし、Ijahis Idja の公式ホームページによれば、この音楽祭は複数の助成金を獲得しており、筆者が確認した範囲では助成の申請はイナリ・サーミ協会 Anár Sámi Association が行っている。2013年から2018年には、10000から15000€のフィンランド教育文化省のフィンランド芸術文化振興事業に関する特定助成金を獲得している²⁷。また、フィンランドの民間の助成団体 Suomen Kulttuurirahasto からはほぼ毎年10000€以上の助成が出ている。助成金はフィンランド国内だけではなく、ノルウェーのカラシヨークにあるサーミ議会 Sámi Council からも得ている。サーミ議会のホームページで公開されている範囲では、2016年度は15000NOK²⁸、2017年は20000NOK、2018と2019年30000NOK、2020、2022年は40000NOK の助成金を獲得しており、年々助成金が増加していることがわかる²⁹。開始当初は小規模な音楽祭だったものの、年々観客が増加していること、そして、様々な演奏形態のアーティストが出演するため、音響設備や設営にも費用がかかることが推測できる。Näkkäljärvi によると、フィンランド教育文化省から特定助成金を得ているものの、そのことによって「サーミとしての政治的主張」ができないことにはつながっていないということである。筆者が調査した2023年の音楽祭ではさほど政治的な側面は感じられなかったが、パネルディスカッションではサーミに関する問題意識が取り上げられることが多く、開催年によってはステージ上で政治的主張が行われることもある³⁰。

5. 2023年のIjahis Idjaの調査から

音楽祭のパフォーマンスの多くは Sajos の中庭にある特設ステージで行われるが、パフォーマンスにより Sajos のホール内で行われることもある。また、2023年度においてパネルディスカッションは

Sajos から徒歩圏内にある SIIDA Museum のホールで行われていた。Näkkäljärvi によると、この音楽祭の企画はフィンランドのサーミ音楽センターやイナリ・サーミ協会と共に、前年の9月から始まるという。プログラムの構成についてはアーティストック・リーダーである Näkkäljärvi が担当しており、プログラムの構成について彼女は以下のように語っている。

ヨイクを使ったワールド・ミュージック、サーミのパーティー・ミュージック、可能であれば先住民の音楽、伝統的に演奏されてきたサーミの声の音楽のスタイルなど、いい組み合わせを見つきたいです。そしてサーミの伝統的な歌唱のスタイルも取り入れる必要があります³¹。

実際に2023年の音楽祭では、伝統的なものから前衛的なプログラムまで、幅広く多様なプログラムが準備されていた（表1）。以下、「5-1」で実際に行われたプログラムの内容を確認する。

表1 Ijahis Idja のプログラム

8月18日	プログラムの内容
09:45～12:00	子どもと若者のためのプログラム（SajosとSIIDA Museumで開催）
13:00～14:15	子どもたちによるパフォーマンス
17:30	開場及び伝統工芸品の販売開始
18:30～19:30	Anna Morottaja & Tallari(フィンランド、イナリ・サーミとPelimanniのバンド)
20:00～21:00	Gabba(ノルウェー出身のバンド)
21:30～22:30	Maxida Mäarak(スウェーデン出身)
23:00～00:15	KEiINO(ノルウェー出身)
8月19日	プログラムの内容
12:00	パネルディスカッション（SIIDA Museumで開催）
14:00	開場及び伝統工芸品の販売開始
15:00～16:00	Biret & Gáddjá Haarla Pieski(フィンランド出身のダンサー)
16:30～17:30	Talent Stage
18:00～19:30	投げ縄のコンペティション
20:00～20:30	伝統的なサーミの音楽
21:00～22:00	Solju(フィンランド出身の親子ユニット)
22:30～23:30	Katarina Barruk(ノルウェー、ウメ・サーミ)
00:00～01:15	Felgen Orkester(ノルウェー出身のバンド)

5-1. プログラムの内容について

8月18日のプログラムは昼に開始され、幼稚園から小学生くらいの子どもたちによるパフォーマンスが行われた。午前中のリハーサルに参加していた人によれば、スクールイベントとして音楽祭に参加しているという。Näkkäljärvi も同様に、「私たちが知っている子どもたちや若者のパフォーマンスをフェスティバルに招待しています。子どもたちの日には、学校にも参加を呼びかけています」と証言している。子どもたちのステージでは、グループや個人で多様な音楽形態がパフォーマンスされ

た。例えば、伴奏つき、あるいは無伴奏のヨイク、斉唱、独唱によるヨイク、さらにはピアノの独奏、スコルト・サーミ語のラップのパフォーマンスなどが挙げられる。斉唱でヨイクをすることは、サーミの音楽に触れるきっかけとなっていることが推察され、早い段階でサーミの音楽的な教育を受けていることが考えられる。ヨイクは本来、西洋芸術音楽的な音程を伴わないものだが、子どもたちが斉唱でヨイクをする際にはキーボードで音合わせが行われていた。また、観察した範囲では、サーミの子どもたちや若者はラップを好む傾向があり、これはウツヨキ出身で北サーミ語のラップをする Ailu Valle やイナリ・サーミのラッパーである Amoc らの影響が大きいと考えられる。子どもたちによるパフォーマンスでは入場料がなく、観客の多くは保護者や親族だと思われる。親族以外に、近隣の幼稚園の幼児が複数人徒歩で Ijahis Idja に訪れ、子どもたちのステージパフォーマンスを見学する様子が見られた。それぞれのミュージシャンについては「5-2」で詳述する。表1からも、他国のアーティストも参加していることが読み取れるが、司会進行は基本的に北サーミ語、フィンランド語、そして英語で行われていた。このことは非サーミ語話者、他のサーミへの配慮、そしてフィンランド国外のサーミ人のための施策だと思われる。フィンランド以外のアーティストは、トークでは英語を話すことが多かった。なお、他のサーミのフェスティバルにおける言語的な問題については、筆者が把握しきれていないため、今後の課題とする。

8月19日のプログラムではサーミの幼児期の音楽教育に関するパネルディスカッションが行われた。またこの日の音楽祭のプログラムの前半では、フィンランド出身の Biret & Gáddjá Haarla Pieski による前衛的なダンス、「タレントステージ」で、イナリ・サーミの音楽家とイナリのダンスグループである Ulpu já usteveh、ウツヨキ出身の若手ラッパー Yungmiq など、フィンランドに居住する新鋭のサーミ人アーティストたちがパフォーマンスしていた。「サーミの伝統的な音楽」では、俳優、そして音楽家として活動している Niillas Holmberg がヨイクを、スコルト・サーミの Hanna-Maaria Kiprianoff が leu'dd をパフォーマンスし、これらは無伴奏で行われていた。この日のみ実施されたイベントとして、Sajos の中庭で行われた投げ縄のコンテストが挙げられる。サーミは伝統的にトナカイ飼育を生業としていたため、投げ縄はトナカイを捕まえるためにも、古くからサーミの生活に欠かせないスキルであり、そして子どもたちにとっては遊びの機会でもあった。Ijahis Idja のコンテストにおいては、4歳から参加することができる。このような投げ縄のコンテストは、Ijahis Idja 以外にもノルウェーのサーミ・イースター・フェスティバルやトロンソの Sámi Week などでも開催されていることから、サーミの習慣に根づいた伝統を伝承するイベントであることがわかる。

このように、音楽祭のプログラムは「子どもたちのためのプログラム」「伝統的なもの」、「前衛的なもの」、「前衛的なもの」まで幅広く、さらにはサーミの習慣に根づいたイベントも開催されていた。つまり、老若男女問わず全ての人が参加できるようなプログラムが設定されているのである。

5-2. 参加アーティストとその音楽について

アーティストは、サーミだけで構成されたグループだけではなく、他の著名なバンドとのアンサンブルや、普段活動しているグループ内でサーミは一人だけというケースもあった。例えば、Anna Morottaja & Tallari は、イナリ・サーミの Anna Morottaja の livde に、pelimanni と呼ばれるフィ

ンランドの楽師のグループ Tallari が伴奏をつけていた。Gabba は、ギターやキーボード、トランペットなどの6人組で構成されているが、ヨイクを担当するのは視覚障害者のサーミである John André のみである。このグループは、John André のヨイクに伴奏付けされる形の楽曲が多かった。この2つのグループに関しては、音語や意味のある単語に伴奏がつけられている形をとっており、サーミの世界観を描くような独自のサウンドを作り出していた。スウェーデン出身の Maxida Märak はヒップホップを主軸に活動しているアーティストである。パフォーマンス中のトークでは、政治的な発言や、女性の権利に関する発言があった。彼女は歌詞のある楽曲の中にヨイクを取り入れる形をとっていた。KEiiNO は3人中1人がサーミで、ヨイクは間奏などの際に取り入れられることが多かった。また、彼らは、ABBA の楽曲にヨイクをフィーチャーさせる形でカバーしており、音楽祭ではオリジナルソングがパフォーマンスされるだけに留まらなかった。

1日目については、Morottaja 以外はヨイクを中心に、あるいはヨイクを取り入れながら活動するミュージシャンがほとんどだった。2日目のコンサートに出演した Solju は、歌詞のある楽曲以外にも音語を旋律に乗せたような楽曲が多かったが、動物を模倣した音語だけのヨイクもパフォーマンスされていた。後述する2組のアーティストについては観察できなかったが、ウメ・サーミの Katarina Barruk はウメ・サーミ語の歌詞を歌い、歌の中にはヨイクも含まれていた。ノルウェーの Felgen Orkester は7人中6人が親戚のバンドで、ヨイクとロックンロールを組み合わせた言葉である Joik'n'Roll をモットーに活動しているという。このバンドはロックの伴奏に北サーミ語のみで書かれた歌詞とヨイクの旋律を取り入れる形をとっていた。

出演者を見てみると、アーティストの多くがヨイクを中心に活動しており、前述したようにイナリ・サーミの音楽やスコルト・サーミの伝統音楽の担い手が依然として少ないことが窺える。アーティストは自分で創作した音楽のみならず、家庭内の伝承やサーミの伝統音楽の録音資料から音楽的なインスピレーションを受けることもある。伝統的な音楽は従来無伴奏のため、アーティスト自身がサーミの伝統音楽を再解釈し、ひとつの音楽作品になっている様子も確認できた。今回、出演アーティストにインタビューを申し込んだが、2024年1月9日時点では回答を得られていないため、楽曲制作の様子については今後の課題とする。

6. Ijahis Idjaの独自性

音楽祭の聴衆はサーミの伝統衣装を着用、あるいは着崩してアレンジしている人、伝統衣装は着ていないが、サーミの伝統的なアクセサリーやスカーフを身に着けている人などがおり、サーミを様々な形で示す観客が半数以上見受けられた。サーミ以外の人間が、サーミのスカーフやサーミの伝統工芸品である Duodji などのサーミのアイデンティティを表出できるものを着用することは、サーミ文化の無断利用につながるなどの倫理上の観点から好ましくないとされている³²。このことから、聴衆の多くはサーミであると考えられる。他方、音楽祭の存在は知らなかったが、偶然旅行中だったため来場した外国人や、ツーリングの途中で立ち寄った人も見られた。

複数のサーミのフェスティバルがある中で、聴衆は、Ijahis Idja をどのように捉えているのか、そしてこの音楽祭の独自性について、ここでは、聴衆、そして運営の発言に焦点を当て、後段では他

の音楽祭と比較して検討する。Ijahis Idja の独自性について、前述した A さん（女性）は「熱心なフェスティバルだ。ここでは、ややノルウェー風の、やや英語風の、そしてもちろんフィンランド風のサーミの音楽、そしてイナリの音楽など、異なった文化がある。」と証言してくれた³³。確かに異なった音楽は聴けるが、他のサーミのフェスティバルでもノルウェーやスウェーデンのアーティストが出演し、サーミ地域の民族的紐帯が意識されている点は共通している。しかし、フィンランドに居住するサーミの伝統音楽を聴ける機会が限られているため、このような機会を提供していること自体が音楽祭の独自性の一つだと考えられる。また、B さん（男性）は、「フィンランドで開催される、おそらく唯一のサーミの音楽祭だからだ。」と証言していた³⁴。さらに、Yle のインタビューでは、Ijahis Idja のプロデューサーである Oula Guttorm³⁵が次のように語っている。

ここはサーミ人新人アーティストにとって重要な舞台で、彼らはここで自分たちの音楽を聴いてもらうことができます。[……]私たちは何年にも渡って子どもたちや若者向けにこのコンサートを開催してきましたが、それらは実を結んでいるようです。もちろん、伝統的なコンサートについて考えてみると、声のスタイルでは、彼らが演奏できる舞台はあまり多くありませんが、その一方で、人々がヨイクを生で聴くことができる場所を私たちは毎年提供しており、そのことは私たちにとって非常に重要で、価値があるものなのです³⁶。

彼の発言から、この音楽祭はヨイクを生で実際に聞ける環境を提供すること、サーミの新人アーティストにとって自らアピールする場となっていること、そして子どもたちや若者をサーミ社会に結びつけることを重要視していることが読み取れる。このように、聴衆や運営は「ヨイクを生で聴ける環境」そして「異なった種類の音楽」を聴けることを評価している。このことから、現在は CD や音楽配信などをはじめ、さまざまなサーミの音楽を聴くことができるようになっているが、ヨイクを含めたサーミの伝統音楽を生で実際に聴ける環境は依然として限られていることが窺える。また、Ijahis Idja の独自性について、Nakkäljärvi は以下のように語っている。

Ijahis Idja は村の中で開催されており、ノルウェーで開催されるサーミの夏のフェスティバルのように、自然の中では行われません。Ijahis Idja の会場には、キャンプ場也没有。その反面、フェスティバル会場の近くにホテルがたくさんあるのはとてもいいことです。

また、独自性の一つとして、最初からすべての人 [サーミの] ためにフェスティバルが企画されてきたことです。フェスティバルの場所とプログラムは、家族連れにも、パーティーを楽しむ人にも適しています。子どもたちをサーミ社会により強く結びつけるためには、子どもたちがフェスティバルを訪れることが重要なのです³⁷。

つまり、フィンランドで開催される Ijahis Idja では、「村」すなわち「サーミの共同体」の中で行われていることが独自性のひとつと見なされていることが読み取れる。彼女が発言しているように、ノルウェーの Kåfjord で開催される Riddu Riddu Festival は、自然の中で行われているからである。

ここでは Ijahis Idja との比較のために Riddu Riddu Festival についても言及しておきたい。

Riddu Riddu Festival は、1991年に若いサーミのグループによって発案された。1990年代、Kåfjord ではサーミへの差別意識が根強く残り、サーミ語が書かれた道路標識に向けて発砲されたり、フェスティバルのために働いていたサーミが嘲笑されたり、唾を吹きかけられたりしたという。そうした社会背景の中で始まったこの音楽祭でも「先住民族の人々のフェスティバル」というサブタイトルがつけられており、毎年海外の先住民族のアーティストが招聘されている。Riddu Riddu Festival が開催される場について、Hilder は以下のように述べている。

Riddu Riddu では、壮観なフィヨルドや、雄大な山、天気良ければ白夜を通してヨーロッパの北極圏の対照的な体験をすることができる。イベントの大半は、現在では Center of Northern Peoples と呼ばれる文化センターとミュージアムの周辺の屋外で行われている。その屋外にあるステージ、マーケットエリア、伝統的なサーミの夏用と冬用のテント、出店、そしてキャンプ場などの色々な場所と、それらを区切る茅葺きの塀は、地元の自然と文化との結びつきを強調している。土地との繋がりは、フェスティバルに来る人に隣接する農地でキャンプすることを求めることでさらに強調されている。これらの方法によって、フェスティバルの場所自体が独自の魅力であるだけでなく、サーミの文化を示し、その文化にとっての地元の環境を強調することに役立っている。さらに、これらのフェスティバルは、フェスティバルの間だけではなく年間を通して、地元のコミュニティからの資源、関わり、参加を必要とする (Hilder 2017, 367)。

このように、Riddu Riddu Festival は、自然の中で行われ地元の自然との結びつきや土地との繋がりが重要視されている。さらに、Hilder によると、Riddu Riddu Festival では、サーミや国政政党の代表者、地方公共団体、メディア、共同組織、企業の関係者と一般市民が交流できる多様な議論の場やセミナーがあるという (Hilder 2017, 370)。そのため、この音楽祭は単にサーミの伝統音楽を保存・継承する場として機能しているだけでなく、複数の形で社会との繋がりを促そうとしていることが窺える。

他方、Ijahis Idja は村の中で開催される。つまり、普段サーミのコミュニティが使用しているような社会的な空間の中で実施される音楽祭のため、「サーミの共同体」の中で非日常的なイベントがきっかけとなってサーミとしての帰属意識が新たに醸成され、伝統文化と共同体を有機的に結びつける試みがされていることが読み取れる。

7. まとめと今後の展望

フィンランドで開催されるサーミの音楽祭 Ijahis Idja は、Sajos の建設計画にあたり発案されたものだった。ヨイクを中心に据えて活動するアーティストは、フィンランドのみならず、ノルウェー、スウェーデンからも出演しており、非常に規模の小さな民族集団が国境を越えて伝統音楽を介して結びつこうとする様子が確認できた。また、担い手の数が少ないものの、フィンランドに居住するサーミの失われた伝統だと考えられていた livde や leu'dd のパフォーマンスも必ず提供されている。とく

に、フィンランドに居住するサーミに、子どもの頃からサーミの文化に触れる機会を提供することで、サーミという民族集団として、そして、それぞれの言語グループのサーミとしてのアイデンティティの形成に繋がるであろう。また、Kari Jaeger と Reidar Mykletun が主張するように、Ijahis Idja においても、過去と現在、そして未来が融合した形で提供されており (Kari Jaeger, Reidar Mykletun, 2013, 223)、さらには「フィンランドに居住するサーミである」という帰属意識が生まれる場所として機能していることが理解できた。実際に、子どもたちのパフォーマンスでは、少年たちがスコルト・サーミ語でラップをするパフォーマンスがあり、「伝統的な音楽」とは異なるものの、サーミ社会と現代的な要素を結びつけた新たな可能性も示されていた。一方、この音楽祭は「先住民族の人々の音楽を称えるフェスティバル」だが、実際にはフィンランドのサーミの音楽を生で聴ける機会を提供する場、子どもたちや若者をサーミ社会に結びつける場、そして新人アーティストが自らをアピールできる場として重要視されていることがわかった。また、この音楽祭は、「フィンランドで開催されるサーミの音楽祭であること」、そして、「村の中」つまり、サーミの共同体の中で開催され、伝統文化を共同体と有機的に結び付けようと試みていることが、独自性のひとつだと捉えられていることが確認できた。一方、この音楽祭とフィンランド政府との関わりの中でサーミのアイデンティティ形成に見られる影響の問題、および音楽祭の政治的な側面については明らかにできなかった。そのため、予算の実態も含めて引き続き調査を進めたい。今後は、ノルウェー側のフェスティバルと比較することで、フィンランドとノルウェーのサーミのアイデンティティの所在や、子どもたちにヨイクやサーミの音楽をどのように伝承しようとしているのかを検討する。また、フェスティバルの開催される場についても比較検討する予定である。

註

- 1 詳しくは「3-2」で説明する。
- 2 アルタダムの建設反対運動は、1968年から1982年にかけて起こったノルウェーのアルタ川流域における水力発電所の計画に反対する一連の運動のことを指す。アルタ川流域では、サーミの伝統的生業であるトナカイ放牧を行うものや漁業従事者などが多数おり、ダムの建設はサーミの暮らしが脅かされるものであった。結果的にダムの建設が実行され、トナカイの放牧地域は水没し漁業もできなくなった。
- 3 SIIDA Museumホームページより引用
<https://www.samimuseum.fi/anaras/english/kieli/kieli.html> (2023/10/08最終アクセス)
- 4 ただし、このうちの Akkala Sámi は2003年に消滅したとされている。
- 5 ILO 第169号条約とは ILO (国際労働機関) により1989年に採択された「原住民及び種族民条約」のことである。具体的には次のサイトを参照されたい。
https://ilo.org/tokyo/standards/list-of-conventions/WCMS_239010/lang-ja/index.htm (2023/08/26最終アクセス)
- 6 イナリのホームページ
<https://www.inari.fi/fi/inari-info/tilastotietoa.html> (2023/08/29最終アクセス)

- 7 「冬戦争」は第二次世界大戦禍の1939年に、ソヴィエト連邦がフィンランドに侵攻した戦争のことを指す。この「冬戦争」は1940年に終わったものの、1941年にヒトラーが対ソ連戦争を開始すると、ドイツ軍が国内に入っているフィンランドに対してソ連軍は各地で空爆をおこない、フィンランド政府は6月25日に対ソ連戦争に踏み切った(百瀬、熊野、村井、1998, 354)。後者の戦争は「継続戦争」と呼ばれている。
- 8 南サーミ語では orvuolle と呼ばれている。
- 9 ヨイクの音語や発声に関する情報は全て Jones-Bamman (2000) を参照した。
- 10 Jouste の論文はフィンランド語で執筆されているが、筆者はフィンランド語の理解ができないため本稿では英語の要旨を参照した。
- 11 <https://pledgetimes.com/music-anna-morottaja-from-the-inari-sami-knew-nothing-about-her-own-family-but-then-she-found-mind-boggling-recordings-such-is-the-livde-song-which-was-thought-to-have-already-disappeared/> (2023/08/29最終アクセス)
- 12 Anna Morottaja. *Morottaja Anna: LIVDE*. Anna Morottaja 2021. 私家版. 2021年リリース
- 13 Ijahis Idja 公式ホームページより <https://www.ijahisidja.fi/en/> (2023/09/28最終アクセス)
- 14 フィンランド国土調査ホームページより <https://asiointi.maanmittauslaitos.fi/karttapaikka/?lang=en> (2023/09/21最終アクセス)
- 15 イナリのホームページ <https://www.inari.fi/fi/inari-info/tilastotietoa.html> (2023/08/29最終アクセス)
- 16 Ijahis Idja の立ち上げの経緯については以下のサイトを参照した https://se.wikipedia.org/wiki/Ijahis_idja (2023/08/29最終アクセス)、
Yle Sápmi “Muital Yle Sápmái buoremus Ijahis idja -muittuidat!” 2017年8月14日リリース <https://yle.fi/a/3-9774201> (2023/08/29最終アクセス)
- 17 Anna Näkkäljärvi-Länsman は、2009年から Ijahis Idja のアーティストック・リーダーとして赴任しており、自身も Ánnámáret という名でアーティストとして活動している。また、ウツヨキを拠点とするサーミ音楽院の主任教師を担うなど、後進の指導にもあたっている。
- 18 フェスティバルの運営者の選出については今回の調査では明らかにならなかったが、Ijahis Idjaのホームページによると、2023年のフェスティバルの運営はサーミ人のミュージシャンとして実際に活動している人物、サーミ語に精通している人物などによって組織されていることがわかった。
- 19 何年から8月開催になったのか、今回の調査では明らかにならなかった。
- 20 Sauli Antikainen “Ijahis idja -alkuperäiskansojen musiikkitapahtumaa vietettiin Inarissa” : <https://yle.fi/a/3-6262811> 2012年8月20日リリース (2023/08/29最終アクセス)
- 21 Ijahis Idja 公式ホームページより <https://www.facebook.com/ijahisidja>
- 22 2023年8月19日 Ijahis Idja のマーケットの販売者の話による。(ノルウェー Karajok 出身、年齢、氏名は非公開)
- 23 Anna Näkkäljärvi-Länsman へのインタビューより。
- 24 2012年のテーマでは先住民の音楽の順応性と、それが時間の中でどのように生きているかを強調することを目的としていた。筆者が実際に訪れた2019年はサーミの言語に関するパネルディスカッションが開かれ

ていた。

- 25 Pirita Näkkäläjärvi “Viisi syytä miksi Inarin Ijahis idja on niin tärkeä festivaali” 2015年8月3日リリース
<https://yle.fi/a/3-8193927> (2023/08/29最終アクセス)
- 26 このプログラムは事前申し込みをした子どもや青少年に限定される。
- 27 2018年以降の記録は現時点では確認できていない。
- 28 ノルウェー通貨であるノルウェー・クローネの略。2023年10月2日現在、1NOK≒13円。
- 29 サーミ議会による文化助成
<https://www.saamicouncil.net/en/cultural-fund> (2023/10/02最終アクセス)
- 30 2016年には、ノルウェーとフィンランド両政府間で結ばれたテノ川流域の漁業を制限する協定への強い反対の姿勢を見せていた。
- 31 Anna Näkkäläjärvi-Länsman へのインタビューより。
- 32 サーミ議会のホームページに掲載されているサーミの観光に関する倫理的ガイドライン
<https://www.samediggi.fi/ethical-guidelines-for-sami-tourism/?lang=en#toggle-id-2> (2023/10/08最終アクセス)
- 33 2023年8月19日 Ijahis Idja のマーケットの販売者の話による（北サーミ、ノルウェー Kautokeino 出身、年齢、氏名は非公開）。
- 34 2023年8月19日参加者の話による（キルディン・サーミ、ノルウェー Karajok 出身、38歳、氏名は非公開）。
- 35 彼自身も音楽活動をしており、サーミのレコーディング会社である Tuupa Records でアーティストのマネージャーを務めた経験がある。現在は、サーミ音楽センターのプランナーでもある。
- 36 Pekka Viinikka, Maija-Liisa Juntti “Alkuperäiskansojen festari Ijahis Idja esittelee musiikkia, jota muualla Suomessa tuskin tunnetaan – Tuottaja: Tärkeä areena saamelaisartistille” 2023年8月18日リリース、動画のインタビューより。
<https://yle.fi/a/74-20045936> (2023/09/06最終アクセス)
- 37 Anna Näkkäläjärvi-Länsman へのインタビューより。

参考文献

- 小内透（編）2018 『北欧サーミの復権と現状-ノルウェー・スウェーデン・フィンランドを対象にして- 先住民族の社会学 第1巻』 東京：東信堂
- 百瀬宏、熊野聰、村井誠人（編）1998『新版 世界各国史21 北欧史』東京：山川出版社
- Hilder, Thomas R. 2017 “Sámi Festivals and Indigenous Sovereignty.” *The Oxford Handbook of Popular Music in the Nordic Countries*. edited by Fabian Holt and Antti-Ville Kärjä: 363-368. Oxford University Press: New York
- Jaegar, Kari, and Reider, Mykletun. 2013. “Festivals, Identities, and Belonging.” *Event Management* Vol. 17, 213-226.
- Jones-Bamman, Richard Wiren. 2000. “Saami Music.” *Garland Encyclopedia of World Music(vol.8) Europe*:

299-308.

Jouste, Marko. 2011 “Tullácalmaaš kirdáččij ‘Tulisimillä lenteli’. Inarinsaamelainen 1900-luvun alun musiikkikulttuuri paikallisen perinteen ja ympäröivien kulttuurien vuorovaikutuksessa.”, (English Abstract), Tampere University Press.

———2017 “Historical Skolt Sami Music and Two Types of Melodic Structures in Leu'dd Tradition.” *Electronic Journal of Folklore*, 68(2), pp.69-84.

Lehtola, Veli-Pekka. 2004. *The Sámi People: Tradition in Transition*. Fairbanks: University of Alaska Press.

Müller, Dieter K., and Robert Pettersson. 2006 “Sámi Heritage at the Winter Festival in Jokkmokk, Sweden.” *Scandinavian Journal of Hospitality and Tourism*, Vol. 6, No. 1, pp.54-69.

参照サイト

Ijahis Idja公式ホームページ

<https://www.ijahisidja.fi/en/> (2023/10/06最終アクセス)

インタビュー・インフォーマント

Anna Näkkäläjärvi-Länsman (Ijahis Idja アーティスティック・リーダー) メールでのインタビュー。回答日2023年9月10日。

現地調査実施

2023年8月17日～2023年8月19日 (フィンランド、イナリ村)